

増田 手古奈（ますだ・てこな）

1、プロフィール

俳人。師の高浜虚子より「東北の重鎮」と評され、ホトギス系俳誌「十和田」の主宰として、長きにわたり客観写生の俳句の道を広めた。

<生没>

1897(明治 30)年 10 月 3 日 ~ 1993(平成 5)年 1 月 10 日

<代表作>

『手古奈句集』『合歓の花』『定本増田手古奈句集』『山荷集』『つらつら椿』

<青森との関わり>

南津軽郡蔵館村(現大鰐町)生まれ。昭和6年に大鰐町で俳誌「十和田」を発行主宰する。

2、作家解説

本名は義男。大正 11 年に東京大学法医学教室で血清学の研究をしていた時、同じ教室にいた水原秋桜子に強く勧められて高浜虚子の門に入る。大正 12 年、真間の手古奈堂(千葉県)吟行にちなみ、手古奈の俳号が生まれた。時は虚子門ホトギスの四S台頭の時代であり、手古奈はそれにつづく新人として、ホトギス俳句興隆のために活躍した。

昭和6年、家業を継ぐべく郷里の大鰐町に医院を開業。この年の1月に東北では唯一のホトギス系の俳誌「十和田」を創刊した。秋桜子・誓子・青邨・素十らが近詠を寄せ、普羅・たけし・泊月らが続々と手古奈を激励に訪れ、創刊期を支えた。以後 60 年あまりの長きにわたり、手古奈は客観写生の俳句の道を広め、「十和田」は平成5年5月の 734 号で終刊となった。句碑は 30 基を超え、昭和 51 年には大鰐町の名誉町民第一号の称号を受けた。

手古奈の句は簡潔ですっきりしていてリズムがあり、高浜虚子は『手古奈句集』の序文に次のように記している。「その句は常に平常心を失はない。壮大な景色、

大きな活動を描くにしても、悠揚として迫らない。巧みな叙法といってもければ少しも無い。どことなくゆったりしてゐて、大人の風格があると云へる。斯くして手古奈君はとこしへに東北の俳諧の重鎮たるを失はない。」と。

3、資料紹介

○『定本増田手古奈句集』

図書

1969(昭和44)年4月20日

215mm×160mm

俳誌「十和田」40周年を記念し発行。序(高浜虚子)は『手古奈句集』のものを再録、句は著者自選の723句を収録。全体を「落の雨」「合歡の花」「大月夜」に分け、制作年代・場所を付す。巻末には諸家による「手古奈俳句鑑賞」、略年譜を掲載している。